

機関番号：15101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520572

研究課題名（和文）幕末・維新时期における藩祖顕彰の総合的研究

研究課題名（英文）The research of venerating the Daimyo ancestor in the end of Tokugawa period

研究代表者

岸本 覚 (Kishimoto Satoru)

鳥取大学・地域学部・准教授

研究者番号：80324995

研究成果の概要（和文）：

本研究は、大名家祖先顕彰の特質を分析し、幕末・維新时期における祖先顕彰が持つ歴史的性情を明らかにするものである。成果としては、まず長州藩のなかから近代の国家祭祀に結びつくような祖先祭祀が浮上してきたという点、そして近世後期を通じて大名家に胚胎する「復古」的な潮流があらかになり、2009年の明治維新史学会で研究報告した。今後は、さらに海外の理論的な研究成果の導入や、19世紀における神仏分離との関係の考察が必要となっている。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to clarify the various aspects of the phenomenon of the apotheosis of the daimyo clan ancestor at the end of the Tokugawa period. The point is that the Meiji National rites had been influenced by the Choshu clan rites, and that daimyo had a tendency to idealize his ancestor's reign. And I presented the results of my research to Meiji Restoration History Society in 2009. This result suggests we need to check foreign religious studies into this research, and rethink the relationship between veneration the clan ancestor and separation of Shinto and Buddhism in the 19th century Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：明治維新史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：藩祖 政治改革 神格化

1. 研究開始当初の背景

近年、近世の宗教・儀礼や幕末維新时期の政治文化研究に視点を置いた研究が大きな潮流となりつつある。藩祖顕彰という点に絞ってみると、近世においては近年『近世大名家家臣団と領主制』（吉川弘文館、1997年）や『民俗神や民族神との関係分析を通じた近

世武家権力神の基礎的研究』（2001～2004年度科学研究費補助金研究成果報告、2005年）を発表した高野信治が注目される。これにより全国の網羅的な藩祖顕彰研究の基礎が築かれた。さらに、近代の戦没者追悼研究は、原田敬一『国民軍の神話』（吉川弘文館、2001年）、本康宏史『軍都の慰霊空間』（吉川弘文

館、2002年)等中堅・若手の近代史研究者による成果が近年著しい。しかし、近世と近代をはさむ幕末維新期の各藩における祭祀の変容についてはほとんど研究がないのが現状である。

2. 研究の目的

申請者は、今までに長州藩の政治と宗教、さらに天皇陵問題など国家祭祀に関わる幕末維新期の政治文化について研究を積み重ねてきた。現在は、外様大名だけでなく、藩祖神格化の過程とあわせて、東照宮についての研究にも踏み出したところである。とくに、鳥取の東照宮についてはほとんど研究がなく、近世東照宮研究の第一人者である曾根原理(東北大学)とともに研究に取り組むこととなった。こうした成果を踏まえつつ、本研究では大名家の祖先顕彰の潮流全体の構造的な特質を分析し、幕末維新期の祖先顕彰が持つ性格を史的にあきらかにするものである。

本研究の大きな特色は、幕末維新期の「雄藩」を政治・経済的な指標としてとらえるのではなく、政治文化的な文脈のなかで位置づけていこうとするもので、近年学界で大きな評価を受けてきたものである。すでに申請者は、それを長州藩という事例で研究を積み重ねてきたが、今回は他の外様大名を含めた明治維新期全体に広げることで、当該期の研究を深めていきたい。全体的な研究構想は、次の三つの視点をもとに展開した。①長州藩のなかからいかに近代の国家祭祀に結びつくような藩祖祭祀・招魂祭・楠公祭祀が浮上してきたのかという点、②大名家に胚胎する「復古」的な潮流、③こうした動向と西洋化といわれる問題との関わりである。本研究は、上記で述べてきたように、「復古」と「近代化」が持つ両面で明治維新を読み解こうとする点に大きな特色があるといえる。

3. 研究の方法

目的で触れた①～③に基づき、19年度は、①②の予備調査、20年度は②の本格的な調査、21年度は②③の本格的調査と資料分析、22年度は③の本格的な調査を進めつつ、①②をまとめて報告し、最終的に③を加えた全体像を提示する計画である。

①～③の具体的な方法を説明すると、まず、①長州藩の戦争過程に見る藩祖祭祀・招魂祭・楠公祭祀について。長州藩を素材とする有効性は、対外戦争(攘夷戦争・四ヶ国連合艦隊下関砲撃事件)を体験し、長州戦争をへて戊辰戦争へとつらなる一連の幕末維新期の戦争を経過しているからである。本研究では、まずこの典型的な幕末維新期の藩を素材

として、現実の戦争が藩祖祭祀・招魂祭に与えたインパクトを考察する。

次に②「復古」の潮流について。幕末期の祖先祭祀がどのような変化をもってきたのかを幕末維新期の諸藩に焦点をあててあきらかにする。その際、九州・中国・四国の国持大名クラスと東北の国持大名クラスの大藩を中軸に、可能なかぎり文献史料の収集につとめ、網羅的な研究方法ではなく、史料を解説しさらに踏み込んだ分析を試みる。

最後に③欧米列強の制度・思想・文化の影響について。注目したいのは、戦没者の追悼や祖先祭祀が、当時の西洋諸制度・思想・文化の影響をどのように受けているかである。この点は、招魂社創始者大村益次郎とその周辺を丹念に読み解くことに焦点をあて、また岩倉使節団に随行した木戸孝允が何度も訪れたアーリントン墓地や、欧米諸国の戦没者追悼との関わりを考察していこうと考えている。さらに、キリスト教が持つ祭祀体系がどこまで影響を与えたのかを幕末維新期全体のなかで考えていくつもりである。

おもな予定調査先は以下の通り。

国立公文書館、鹿児島県資料センター 黎明館・東京大学史料編纂所(島津家)、熊本大学附属図書館永青文庫(細川家)、佐賀県立図書館(鍋島家)、福岡市立博物館(黒田家)、柳川古文書館(旧柳川藩主立花家文書)、岡山大学附属図書館(岡山池田家)、津山郷土博物館(津山松平家)。

横浜開港資料館(海外新聞・海外資料、利用料100円)、京都外国語大学附属図書館(スペシャルコレクション)。

弘前市立図書館(津軽家文書)、秋田県公文書館(佐竹宗家他)、盛岡市中央公民館(南部家)、山形県立図書館等(上杉家)、宮城県立公文書館(伊達家)、国文学研究資料館(真田家)、土佐山内家宝物資料館(山内家)、宇和島市立伊達博物館(宇和島藩主伊達家文庫文書)、国文学研究資料館・徳川林政史研究所(以上蜂須賀家)、国立国会図書館(旧幕府引継文書)

4. 研究成果

研究の成果は、2009年度10月・11月に明治維新史学会の例会・大会において発表した「大名家の祖先顕彰と政治改革」にほぼ集約されている。

その内容は、まず前提として、大名家が自らの出自の見直しや顕彰を展開する背景には、寛政期前後の幕府の歴史・地誌編纂事業の展開のなかで大名家の自己意識が強くな

ってきたことがあげられる。林述斎を中心に進められたこの編纂事業のなかで藩は自らの来歴や由緒に大きな関心をはらうことになるのである。このなかで大名家の祖先や、徳川将軍家、天皇・朝廷との関係が、改めて問い直されていく。さらに、大名家の当主あるいは領主として家臣や領民とどのように向かい合っていくのかが再確認されることとなったと考えられる。つまり、いわゆる近世中後期の藩政改革において、こうした近世の諸関係の再構築が図られていったことを論じ、に大名家の祖先顕彰の展開過程に焦点をあてながら幕末期の政治改革の性格に接近した。

この点からは、従来指摘されているような藩主像ではなく、他の有志大名とは異なる藩主の評価を見ていくことができるのではないかと指摘した。この視点が従来の藩政改革論や尊王攘夷運動、公武合体・公議政体論などの重要な論点にどのようなかたちで絡み合っていくのか、いまだ中間報告的・試論的な枠組みから逃れられないが、現在の考えをまとめたみたわけである。

また、祭祀研究に関わる成果としては、「大名家の祖先顕彰と政治改革」（井上智勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会2 国家権力と宗教』吉川弘文館、2008年）がある。

そもそも幕末期の長州藩を宗教や祭祀から考えるにあたっては二つの点を指摘することができる。第一に、天保改革以降の「淫祠解除」政策の展開と権力の民衆統制とその抵抗というプロセスであり、第二に幕末内乱期における藩祖四霊に対する臨時祭祀である。いかに民衆の信仰世界に権力が介入していくのかという問題と、権力者自らの祖先祭祀に関わるものは、ほとんどその関係については言及されていない。その意味では、天保改革以降の幕末維新时期にかけての祭祀・宗教をつなぐ議論が必要だと考えられる。そこで、この論文では、内乱期に突入する以前の天保期～安政期にかけての藩による祭祀改革（歴代藩主祭祀）に焦点をあてて、その概要と特徴をあきらかにしていくことを課題とし、こうした「死」をめぐる儀礼を改革していこうとするなか、大名家の構成員と当主がどのように祖先と向き合っていくのかを見ていった。注目した点は、一見・煩雑である藩の祭祀がどのような秩序を形作りことなるのかを天保期から安政期にかけて行われた藩の改正のなかで検証したことである。

従来、近代へのプロセスと幕末期の「尊王攘夷」、国学者・神職などの勃興にかかわり、どちらかといえば「神道化」に焦点をあてていくものがおもに存在してきたが、本稿ではむしろ中心的な儀礼である仏教祭祀の改正のプロセスを、一方で行われていく神祭との

関わりの中で位置づけた。第二に、それに関わっては、仏教祭祀であるにもかかわらず、これらの改革で中心的な役割を演じたのは藩主菩提寺などの僧侶でもなければ、神主でもなく、藩の官僚機構であり、その基本的な考え方は、儒者の山県と小倉、国学の近藤だけであったことを明らかにした。こうした点を踏まえて当該期の藩主をめぐる祭祀の性格を浮かび上がらせたのである。

最後に、「大村益次郎」（笹部昌利編『幕末維新人物論』昭和堂、2009年）においては、単なる招魂社創設者や軍事的能力の持ち主という視点からではなく、大村益次郎の生涯を追うなかで、蘭医から洋学者・洋学教育者となり、そして藩の軍事的な中枢にのし上がり、そしてついには木戸とともに新政府の軍事的な中心人物となることを押さえた。そのうえで、彼の軍事的な構想力が広範囲に及んでいたことを重視し、その総合性のなかから招魂社など戦没者祭祀が登場していくことを指摘したのである。

以上、研究の成果は、当初予定していた報告書ではなく一般書店からの著書として出版し学界に問おうと執筆を行っている。現在、出版助成申請に向けて準備を進めているところである。

積み残した課題として、海外関係の資料だけでなく、国内外の政治と宗教に関する理論的研究がある。とくに、当該研究を進めるにあたっては、フランス革命期の非キリスト教化運動や政教分離に関わる研究を学ぶことが不可欠と考え、現在専門家と講読を進めているところである。また、もう一点は本研究を進めていくなかで浮上してきた19世紀における神仏分離の問題である。これもあわせて新規の科研で研究を積み重ねて行こうと思っている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計2件）

①明治維新史学会例会（2009年10月3日、明治大学）岸本覚「大名家の祖先顕彰と政治改革」

②明治維新史学会大会（2009年11月14日、神奈川県公文書館）岸本覚「大名家の祖先顕彰と政治改革」

〔図書〕（計2件）

①岸本覚「幕末萩藩における祭祀改革と「藩祖」」
(井上智勝・高埜利彦編『近世の宗教と社会 2 国家権力と宗教』吉川弘文館、2008年) pp135-158

②笹部昌利編『幕末維新人物論』昭和堂、2009年
岸本覚担当「吉田松陰」「大村益次郎」
pp25-44, 267-290

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 ()

研究者番号：80324995

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：